

戦場の村、「男の月経」そして密貿易  
——山地アラペシュ人クブレン村の口碑から——

紙村 徹

(立教大学アジア地域研究所特任研究員)

はじめに

2014年3月、ぼくはたまたまパプアニューギニア東セピック州の山地アラペシュ人の村を訪れる機会を得た。行政上はウォギナラ村に含まれるが、実態は独立のクブレン村(Wabuur Kuburen)で、1930年代に調査したマーガレット・ミードの著書『The Mountain Arapesh』にも出てくる。東セピック州の北海岸に近いプリンス＝アレキサンダー山脈の尾根筋に村が立地していて、海拔は700m前後であろうか。村に到着したのは3月上旬であった。海拔が結構あったためか、毎日北東風が吹いていて、東セピック州にしてはずいぶんと涼しく、しのぎ易かったことをよく憶えている。ところが3月下旬ともなると、その北東風、おそらく北東モンスーンであろうが、これがピタッと止んでしまったのである。ほお、モンスーンとはこういうものか、などと感心したものだ。

実はクブレン村を訪れる事前に、州都ウェワクから最近流行りのグラスファイバー製の小型ボートに乗って、沖合いのムシュウ島とカイリル島を訪問した。この時は東海大学の川崎君の案内だったためもあり、まったく川崎君任せで大名旅行を決め込んだのだが、このズルがいけなかった。ウェワクからは直ぐ目の前の島なのだが、一日中海の波が荒く、なかなかボートを出せない。一日に2回風ぐ一瞬があり、それを狙って船出するという具合であった。風ぎの来た夕刻に船出したが、風ぎとはいえ、かなり揺れるというか、翻弄されたこと、とてもシンドイものであった。段ボール箱に入れておいた食糧は、ほとんど海水に浸かり、とても食べられるものではなくなっていた。これなら昔ながらのアウトリガー付きのカヌーの方が、ずっと船体は安定しているのではないかなどと愚痴ったものだった。こんな海も、3月下旬にはべた風ぎの海に戻っていた。

こんな北東モンスーンの経験をわざわざ書いたのは、30年ほど東セピック州のフィールドワークに通い詰めていたのだが、そのほとんどがセピック川の支流域に限られていて、北東モンスーンの影響など気にしたことがまったくなかったからである。パプアニューギニアは意外と広いのだ。

ところでArapeshという名は誰がつけたのだろうか？アラペシュ語でこれに近い語はarupeshであろう。arupeshは男性の複数形である。男性の単数形はarumanである。

このようにアラペシュ語では、単数形と複数形がはっきりと区別されている。ちなみに女性の単数形は arumagou で、その複数形は arumatok である。

クブレン村 (Wabuur Kuburen) の近くには、尾根筋沿いにほとんど境界が分からないほど接触して、オモヤ村 (Wabuur Omoya)、ウマネップ村 (Wabuur Umanep)、ウォギナラ村 (Wabuur Woginara) が並んでいる。クブレン村がもっとも標高が高く、ウォギナラ村がもっとも低い。これらの村々が現在では一つの行政村にまとめられているのだ。そして Woginara 1、Woginara 2、Woginara 3 などと区別されているらしいが、住民自身はほとんどそうした呼称を侮蔑している。



図 調査地とその周辺 (Mead (1977) の地図を筆者が加筆して転載)

## 1. 戦場の村

現在のクブレン村の立地が第二次大戦以前のクブレン村と同一かどうかは怪しい。なぜならクブレン村は第二次大戦末期に、日本軍とオーストラリア軍との戦闘の現場になったことがあったからだ。いわば戦場の村であったわけだ。そして当然ながら、パプアニューギニア内陸の村の多くがそうであるように、ここクブレン村においても、第二次大戦の経験は、今なお生々しく人々に記憶されているビッグ・イベントでもあった。そして戦後復興期に相当な住民の再編が行われたらしい。クブレン村、イエミニップ村、ウベン村、オモヤ村などの住民はすべてウォギナラ村に集められ、その後

の再定住化政策によって、各地に振り分けられた。クブレン村を構成する父系クランのうち、バヒネム・クランなどの6個のクランは本来の住民だが、ヌミヤドゥオコム・クランなど少なくとも4個のクランは大戦後の新移民である。新移民は許可を得て来住したり、妻方居住婚によって移入したりしている。かれら新移民はクブレン村の土地所有権を持っていない。いわば土地を借りて住んでいるわけだが、そうかと言って地代のようなものを支払ってはいない。一時的な居留民であって、いつかは出ていかなければならないとの共通の了解があるにすぎない。土地所有権保持者たる中核村民と土地所有権のない後の来住者とから、村が構成されていることになる。

クブレン村境界の父系クランには、しばしば同名のクランが見受けられるが、これはあくまでも同名クランであるにすぎなく、出自の共通はないとされる。たとえば同名のバヒネム・クランであっても、イエミニップ村のバヒネムとクブレン村のバヒネムとは、まったく出自を共通にしてはいない。そのために相互に区別するために、バヒネム・プロ・クブレン、バヒネム・プロ・イエミニップのように村名を付ける。それにもかかわらず、なぜクブレン村境界に同名クランがしばしば見受けられるのかは、すべてではないかもしれないが、今のところこう考えられる。すなわちクブレン村境界では、男児が3人生まると、長男はバヒヌと名付け、次男はヌミヤ、三男はラビヌと名付ける慣行がある。そして長男バヒヌの男系子孫はバヒネムと呼ばれ、次男ヌミヤの男系子孫はヌミヤドゥオコム、三男ラビヌの男系子孫はラビネムと呼ばれるようになる。日本での太郎、次郎、三郎に近いかもしれない。かれらの男系子孫は太郎筋、次郎筋、三郎筋となるわけだ。こうした命名慣行があるため、結果的に同名クランがここかしこに現れることになる。

ともあれクブレン村境界のアラペシュ人の父系クラン(jaab)とは、村域を超えるものではなく、特定の村(wabuur)に固有の集団であるらしい。この意味では、クブレン村のクランはまさに地縁クランであるとも言えるだろう。ただしイエミニップ村のバヒネム・クランとヌミヤドゥオコム・クランとは、後者はクブレン村、前者はニューブリテン島キムベ市に居住しているために、本籍のイエミニップ村には誰も住んでいない。そのために同一の一族であることを強く意識するためか、両クランが同じ出自の一族であることを主張し、キヨコリブス部族という新しい名称を創造することもあった。これはあくまで観念上の出自集団にすぎなく、共同集会・儀礼などの集団行動があるわけではない。

クブレン村は戦場の村だったと書いた。第二次大戦末期に、クブレン村には日本軍第18軍猛部隊所属のナカイ・トゥループが北部海岸ブーツ、ダグアから逃げ込んできて、しばらく駐留していた。北部海岸西方のアイタペ方面から進撃してきたオーストラリア軍と遭遇し、クブレン村近辺で戦闘が開かれたという。クブレン村からコタイ村へ峠を越えて抜ける途中にあるコヒヤケン洞穴(鍾乳洞)にも、ナカイ・トゥループは隠れ潜んだ。ナカイ・トゥループとは、おそらく第18軍猛部隊傘下の第20師団

中井支団と思われる。ナカイ・トゥループの隊員には、ワギモト、サブロー（三郎？）、シラセ（白瀬？）、カニク（金子？）、サイトー（斎藤？）、ハマダ（浜田？）、よく咳をした通訳のコバヤシ（小林？）などがいた。他におそらく軍医かもしくは衛生兵のヒヤシダ・ヤマダ（吉田と山田か？）が居たらしい。この小隊は1942年にクブレン村に進駐したという。これら隊員の名前は、当時ナカイ隊長の「トーバン」（当番）をしていたウォギナラ村在のタルエン婆さん（80歳以上）が記憶していた。もうこの村でも、タルエン婆さん以外に当時の日本兵との直接の出会いを経験した人は存命していない。タルエン婆さんによれば、ナカイさんは最終的にヤンゴール（東セピック州北部海岸近く）で戦死したらしい。それ以前に、クブレン村でのオーストラリア軍との戦闘でかなりの日本兵が戦死しているが、生き残った日本兵はウォギナラ村とアニューウェニウム村との境界のトゥラップ川を下って、マプリック町方面へと逃げて行ったという。おそらくは中井小隊は、マプリック町から再度北部海岸方面へ戻り、連合軍側の艦砲射撃を受け、中井小隊長はヤンゴール辺りで戦死したということだろう。

クブレン村の一画、あまり人家の少ないところがあり、モゼス・カワダの小屋が1軒あるだけ。なぜならこの辺りで日本兵が多く死亡し、今でも怪しげな気配があり、とても人が住めないのだという。モゼス・カワダの小屋も建っているだけで、住んでいるわけではない。なんでもこの地区の崖下に多くの洞穴があり、日本兵はこれらの洞穴に隠れ潜んでいたらしい。モゼス・カワダの名は、予想がつくだろうが、まさに日本兵の名であるカワダ（川田？）に由来する。モゼスの父親トニー・タイルウオが日本兵カワダを助け、しばらく匿った時に、日本兵カワダからその名をもらったので、自分の息子にカワダの名を付けたからである。友人の名をもらって、自分の子供にその名を付けることは、パプアニューギニアではあちこちでよく聞く。日本兵を助けて、その名をもらったという話だけなら、その限りでは美しい話だが、モゼスのラビネム・クランには、クニャアリが日本兵に殺され首を切り落とされたという話も伝わっている。日本兵とクブレン村民との関係の実態は、なかなか一筋縄ではいかないようだ。

バビネム・ウィター・クランのジョセフ・ニディシ（50歳代、仮名）の父親ベノは、1943年、18歳で日本軍のシーボーイ（軍夫）となり、二つ星の階級で、主に郵便配達の業務を担っていた。またドクター・キャプテン（軍医？）のヨシダと衛生兵のヤマダ付きで働いた。ベノは1945年から1947年まで、ヨシダを自宅に匿い続けたが、1947年にヨシダはベノ宅で、銃剣で首を刺し貫いて死亡したという。覚悟の自死であったらしい。1947年といえば、戦争は終結しており、投降すれば、いずれ日本へ送還されるはずだが、外界から隔離されていた日本兵は、戦時中から叩き込まれていた戦陣訓を内面化していたからであろうか、とても投降するなんて考えられなく、「生きて虜囚の辱めを受けるなかれ」に従って、結局は自死しか選択肢がなかったのであろう。ベノは自死したヨシダの遺体を、ウリップとサブアインを結ぶ道路沿いにあるウォギナラ村セメネリン診療所のある場所に埋葬したという。ベノは1984年に死去したが、

その息子ジョセフは、ヨシダのことをあくまでヒヤシダ・ヤマダと呼び、一人の人物であると認識しているが、やはりヨシダとヤマダの二人だと考えるべきだろう。ベノはヨシダの遺品、飯盒と水筒を保存しており、今もジョセフの家にある。ただし遺品とされる水筒には、ぼくが確認した限りでは「赤沼」と書かれていた。どういうことなのだろうか。

クブレン村には、今も日本から毎夏慰霊団が訪れているらしく、遺骨収集も何度かされたらしい。慰霊団がお供えしたと思われる南無阿弥陀仏と墨書された卒塔婆が残されているからだ。ヨシダの遺骨も、彼が大阪府大東市出身だとかで、そちらに返されたという。

ぼくが大戦中の日本軍の動向に関心をもったわけは、1945年2月頃に起こったとされる日本兵による食人事件の聞き取りをしたかったからだ。しかしクブレン村ではそうした事件についてはほとんど聞けなかった。唯一の例外は、ヌミヤドゥオコム・ブロ・イエミニップ・クランのペトロス翁（調査当時74歳、仮名）の経験である。翁の証言によれば、1941年に太平洋戦争が始まり、日本軍の侵攻が始まったため、翁の一家が働いていたモロベ州ワウ金山から徒歩で山越えし、ラエ市からマダン市へ抜け、さらに1944年にはマダンから徒歩でウェアク市へと抜け、1945年にやっと大戦が終了し、ウェアクから内陸のウォギナラ村へと帰った。以上の逃避行のどこで起こったのか不明ながら、この逃避行の渦中で、翁の弟クラコムが日本兵に殺され食べられたという。翁は当時4歳か5歳くらいだからなにも憶えていないが、後日翁の父母からそのことを教えられたという。おそらくその事件が事実であれば、弟クラコム、当時おそらく弟は赤子あるいは幼児であったろうが、彼が殺害され食べられたのは、1944年ころで、マダンからウェアクへと抜ける山道のどこかであったろう。当時は多くの日本兵が熱帯雨林の生い茂る海岸山脈をばらばらに南下しつつあった。当時の軍隊用語で「山南」へと「転進」していたのだ。転進といっても、もちろん連合軍の攻撃から逃げるためであった。そしてほとんど手持ちの食糧は尽きていた。ただし空腹・飢餓のゆえに、日本兵がさっさと食人に走ったと短絡させるのは適切ではないだろう。空腹だからなんとしてでも肉が食べたいというのも、当時の日本人の米と魚の食習慣からは、あまりありそうにない。ポーランド連帯労働者たちが、政府当局の肉の遅配に怒り革命を起こしたのに対して、当時の日本人なら米の配給の遅配で米騒動は起こしたが、なにがなんでも肉をよこせと怒るだろうか。反対に極限的な飢餓状態であれば、人間の身体はもはや肉であれ何であれ、まったく消化吸収できる能力を失っているであろう。いったい人は単なる空腹状態と極限的な飢餓状態の間のどのあたりで食人にはしるのであろうか。よくわからないところだ。それにもかかわらず、1944年から1945年頃に、この地で日本兵による食人事件が多発したことは事実であると考えざるを得ない。ちなみにアラペシュ族には、伝説の森に棲む悪霊や墓暴きの人非人が食人をするということは信じられてきたが、普通の人間が食人を行うなんてまるであ

りえないと考えている。この意味では、日本人一般の食習慣と変わるところはない。ぼくはこの時代の日本人なら、夏バテ防止、精を付けるために、土用の丑の日の脂の乗ったウナギの蒲焼きの延長で人肉食いを行ったのではないかと考えたい。ニューギニアでもフィリピンでも、日本兵の間で秘密の市が立ち、食人の隠喩である「大和肉」「牛肉の大和煮」として売り出されていたらしいが（確か大岡昇平の『野火』にも「大和肉」が出ていた）、本物の缶詰「大和肉」「牛肉の大和煮」なんて当時は贅沢品で、年に何度も食べられる缶詰ではなかったはずだ。夏バテ防止の妙薬みたいなものだったろう。こう考えれば、負け戦で連合軍に追い詰められ、食糧難に陥った日本兵たちが食人に走ったことも、同じ日本人として理解可能になるのではないか。山南へ逃避行をしていた日本兵たちは、ジャングルの中を歩行も儘ならないほどにバテていたのだから。

ちなみにぼくに弟が日本兵に食べられたと語ったペトロス翁は、そのことでことさら同じ日本人であるぼくに、なにか恨みがましい眼差しを向けていたわけではない。どんな感情を抱いていたのかはわからないが、ただ淡々とぼくにそのことを語ったにすぎない。ついでに翁は、日本兵がこの村に「チンギクウ」を残してくれたと語った。「チンギクウ」とは何か。翁は今も畑に植えてあると付け加えた。後日「チンギクウ」を、ぼくは確かめたのだが、つまり「チンギクウ」とは春菊だった。いまなおこの村では栽培されているのだ。つまり翁は、日本兵がただただこの村に害悪のみをもたらしていたわけではなかったと言いたかったのであろうか。

## 2. 男の月経

アラペシュ族についての予備知識として、もう一つ興味をもったことに、この地域一帯にかつて行われていたという男性の成人式の一環としての「男の月経」慣習が、今はどうなっているのか確認しておきたいということがあった。文献によれば、パプアニューギニアでも南部のパプア湾岸から大パプア高原などにかけては、成人式において儀礼的同性愛行為が実施されてきたのに対して、北部のセピック川流域から海岸山脈のアベラム、アラペシュ、ウオゲオ島民などでは「男の初潮」「男の月経」が行われてきたとされている。I.ホグビンはその名も『月経する男たちの島』という著書で、「戦士は襲撃に出かける前に、交易者は航海用のカヌーを彫り、カヌー帆を磨きなおす前に、狩人は豚罾用の網を編む前に、確かに月経があるようにする」(I.Hogbin 1970: 91) と書いている。ウオゲオ島民は、成人式の間だけでなく、男たちが何事かがんばって行おうとする時、日本人だったら「禪を締め直す」みたいな乗りで、男の月経を行ったようだ。マーガレット・ミードはアラペシュ族の「少年は食物禁忌則に加えて、イラクサ刺し、竹棒によるペニス切開やらの规律的衛生学的用法を学習する。規則を破っても誰も非難しないし、彼自身以外誰も悩まない。彼はただ背高い男に成長

しないだけである」と書いているという(Per Hage 1981)。どうやらアラペシュ族では、成人式の機会のみでペニス切開をしていたらしい。

さて現在のアラペシュ族では、この慣習はどうなっているだろうか。ぼくの宿舎の家主のベネディクト君によれば、1980年頃に成人式を済ませたそうだ。ベネディクト君の言う成人式とは、「男の月経」慣行のことだ。ミードによれば、「男の月経」慣行はあくまでも成人式の一部に過ぎないのだが、ベネディクト君は「男の月経」を実修したかどうか、成人式を済ませたかどうかと等価と捉えているようだ。イラクサ刺しのような行事は語られなかった。それでも「男の月経」が今なお行われていることは確認できた。「男の月経」をアラペシュ語では、**nene bakanoup** と言う。**nene** は青少年期男性、**bakanoup** は月経を意味する。成人式は **numunibaar** と言い、ほぼ15歳から20歳くらいの間に行く。しかもアラペシュの多くの村ではこういう成人式をもはや実施していないが、クブレン村やウォギナラ村、ウマネップ村では現在も行っている。これが何故なのかわからない。なぜならことにクブレン村は、成人式以外に、ほとんどの「伝統」的な儀式・慣習を廃棄してしまっているからだ。精霊堂もない、精霊堂祭祀儀礼も廃止した、儀礼的の双分組織もない。パプアニューギニアの村々では、当たり前に見られる精霊堂や伝統的な儀礼や儀礼組織が完璧に消滅しているのだ。ぼくのような、パプアニューギニアに古典的なロマンを求めがちな人類学徒には、とても魅力的な村だとはみなせない。そして現在ではクブレン村は、伝統文化が滅んだ荒地を埋めるかのように、キリスト教原理主義宗派の草刈り場となってしまった。**Apostolic Church, Church of Christ, Pentecost, Re-Bible**,などの宗派である。先述したペトロス翁は **Apostolic Church** の牧師だ。**Pentecost** の牧師をしているリオ・オグラム氏は村の中でも一番豪邸に住んでいる。よほど実入りがいいのだろうか。クブレン村には、今は撤退したが、かつてユダヤ教系の **Bahai na Bahura** さえ進出していた。ペトロス翁の一家は、大戦後にはローマ・カトリック神言会のマヤ神父から、ペトロス一家が教会に来ないと叱責され、それが原因でカトリックを脱退し、**Apostolic Church** に変更したという。**Apostolic Church** の神は本当の神だと断言している。このような社会状況であるにもかかわらず、クブレン村では今なお「男の月経」儀式を実修し続けているのだ。

マーガレット・ミードもすでに書いているように、クブレン村の成人式はけっして村全体の集団行事として行われてきたのではない。むしろ個人的な選択として、個人が自主的に行うものとされている。そうした個人が複数人で同時におこなうこともある。ことに「男の月経」儀式はけっして森の中で行ってはいならない。村からは見えないくらいの距離にある川で行う。ここの川は、セピック川の泥水と異なり、日本の溪流の感じに似ている。こうした溪流沿いに、サゴ椰子、竹、そして和名も学名もわからないが、アラペシュ語で **beiduan** と呼ぶ細長く丈高い木が生えている。受式者は通例では介助人とともにこの川に入り、自らのペニスを露出させる。ここではいわゆる割礼とは異なり、ペニスの包皮を切除するのではなく、介助人が受式者のペニスの亀

頭の上部に *tiasisu* (複数形) と呼ばれる切開道具の刃を当てる。そして介助人は *tiasisu* の柄の上部を拳で打ち付ける。亀頭の上部に刃が打ち付けられると、当然亀頭は切り裂かれる。*tiasisu* を強く打ち付けると、亀頭上部の切り傷から激しく上方へ向かって血液がほとぼしる。この血液のほとぼしりを指して、特に「男の月経」と呼んでいる。受式者自身が、この流出した血液を手にとって、川端に生えている *beiduan* 木の幹肌塗りつける。*beiduan* 木の幹でなくてはならないとされるが、その意味はいまだ不明である。人類学者としては、はなはだ不手際であった。

*tiasisu* という切開用道具は、先が二股に切り裂かれた柄に、その二股の所に、昔は竹製の刃あるいは現在ではスチール製の剃刀刃を差し込み、柄の先端を縛っておく。*tiasisu* は全長 20cm くらいである。見たところ簡単な造りであるが、受式者はそれを自分の手元に長く保存している。ペニス亀頭の切り傷は、1 週間から 2 週間で治癒する。

「男の月経」儀式の介助人は、通例では母方叔父とか交差従兄弟が務めるが、この場合は後で礼金を支払わねばならないが、受式者と同じクランの男性、ことに父方叔父や父方並行従兄弟である場合は、礼金の支払いは不要である。時には受式者自身によって切開を行うこともある。ペトロス翁は自分で行ったという。ペトロス翁の長男であるベネディクト君は、ペトロス翁の父方並行従兄弟のナタウルクが介助した。ペトロス翁の次男マチューが「男の月経」儀式をおこなったかどうかは、父親のペトロス翁すら分からない、マチューはニューブリテン島キンベに移り住んだままだからという。このように「男の月経」儀式の実施は、あくまでも本人の自主的な選択にかかっているのだ。そしてクランの内か外かという境界によって、介助の礼金を支払うか否かが決定されているわけである。さらにペニス亀頭切開に際しては、受式者自身の父親は、実の父であれ養父であれ、その儀式に立ち会いすらできない。

「男の月経」儀式を受けている間は、受式者自身にいくつかの禁止則が課せられている。受式者は 3 日間は自身で料理をしてはならない。まず受式者は家族の料理小屋に立ち入ることすらできないし、料理用の調理用具に触れることもできない。そのために受式者の食事は彼の父母が作って与えるが、その際に受式者は料理小屋に入ってはならない。あくまで料理小屋の外で食べなければならない。この禁止則はいささか疑問がある。なぜならクオマ族、フア族などで、長男は父母から料理された食物を受け取ってはならないという禁止則が一般的だからだ。長男は自分で常に料理して食事をしなければならないのだ。アラペシュ族では確認できていないが、クオマ族の北方にアラペシュ族のテリトリーが位置している。類似の食事の禁止則があっても不思議ではないからだ。寝小屋と料理小屋とが別棟形式である点も類似している。

昔は受式者は 3 日間は男子小屋で過ごし寝なければならなかった。4 日目に忌明けで、日常生活に戻る。今はクブレン村には男子小屋つまり精霊堂は廃棄されたので、家族の家屋で眠るが、いっさい家族からは離れて寝なければならない。受式者が既婚であれば、受式者である夫が家族の寝小屋で眠り、妻と子供は料理小屋で眠ることが



多い。なぜなら受式者は料理小屋に立ち入ることは禁忌であるからだ。ちなみにクブレン村では、親の世代と子供の世代とが別々の家屋に居住するが、共に同じ敷地内であることが多い。つまり二世別棟別居制で敷地の共有制であり、敷地の分割相続はしない。そしてほとんどの家族が単婚であり、複婚はクブレン村では一家族だけである。つまり一夫多妻婚は可能だが、ほとんどの人は一夫一婦婚である。

クブレン村の人々は、「男の月経」儀礼を実修する目的として、「男の月経」を行えば、その男の皮膚が強靱になり、艶々に引き締まると言う。その効果は確かなもので、明らかに目に見えるとされる。「男の月経」を受けた男は、3日間の隔離、昔は男子小屋に、今は自分の家屋の寝小屋に籠らなければならないが、この点はことに女が月経がはじまると3日間の月経小屋に籠らなければならないことと並行関係にあるとされている。月経小屋も今は消滅している。「男の月経」儀礼とは、女性が月経を重ねる毎に、特に思春期においては、見る見るうちに美しく女らしく成熟していく成長効果の、男性による呪的模倣と言えるかもしれない。女性が月経を繰り返す度に速疾に成長していくように、男性もまた同様に「月経」を持てば速疾に成長できるにちがいないというわけだ。どうであろうか。精神分析的人類学者 Bettelheim の唱えるような、女性の持つ月経への男性の嫉妬に由来するとは思えない。

今回の滞在では、当たり前だが実際の「男の月経」儀礼を観察することはできなかった。ただしベネディクト君のような若い世代でも今でも実修していることは確かである。ペトロス翁は、最近の男はあまり「男の月経」儀礼をおこなわない者が多くなったので、体が頑丈でなく、ダメ男ばかりだと愚痴をこぼす。

### 3. 密貿易、あるいは国境貿易

先述したバヒネム・ウィター・クランのジョセフ・ニディシ氏（50歳代、仮名）は、なかなか数奇な人生を送ってきた。彼の属するバヒネム・ウィター・クランとは、本来のバヒネム・クランではなく、バヒネム・クランのいわば寄寓民である。ウィターとは水筒を意味し、この寄寓民を受け入れた本来のバヒネム・クランは、受け入れ以降は特にバヒネム・バナグ・クランと呼ぶようになった。バナグとは網袋を意味する。つまり網袋の中に水筒を入れておくように、ウィター・クランをバナグ・クランが入れておくわけだ。同じような事例は、少なくともクブレン村にはほかにない。

ジョセフ・ニディシの祖先は、5代前のイェトウウィンが北部海岸クミプ村から来住し、クブレン村ラビネム・クランの女ヘシュワイと妻方居住婚をした。妻方居住婚を媒介にして他所者が来住することは、ほかにも類例がある。しかしエトウウィンの場合は、いささか異例で、妻方居住婚をしてクブレン村に移入してから、その後に妻方のラビネム・クランへ編入されたのではなく、バヒネム・クランの寄寓民となったのである。どうやらラビネム・クランの人々との間でトラブルがあったらしいが、

そのトラブルの詳細は伝わっていない、というか、ジョセフ・ニディシは明言を避けた。

ジョセフ・ニディシの顔をよく見ていると、いささか典型的なパプア系の男と感触が異なる。長顔なのだ。この感触には実体因があるかもしれない。彼の一族の始祖は、ナヤレと言ひ、イェトゥウインの5代前の人とされる。ナヤレはマラユで生まれたという。マラユとは、ムラユ (Merayu) のことだろうか。あるいは英語の Malaya に由来するかもしれない。いずれにしるマレーシアのどこかを漠然と指しているのだろう。つまりナヤレはマレー人であったということか。ナヤレはモルッカ諸島テルナテ島に移住し、極楽鳥羽毛をテルナテからバタヴィアへ輸出する仕事をした。周知のように、バタヴィアとはジャカルタの旧名である。パプアニューギニア内陸の村人ジョセフ・ニディシが、バタヴィアという旧名を知っていた点に注目すると、この口碑が単なるでっち上げではない可能性が高いと考えられる。そのうちに、テルナテに極楽鳥羽毛が集荷されなくなり、北部ニューギニアがドイツ領になる頃、ナヤレは新たな極楽鳥羽毛を求めて、テルナテ在のスペイン人とともに、テルナテを出発し、西ニューギニアのジャヤプラ近くのタナメラ、アンボラ、トゥリムリスという土地にやって来た。地図で確かめると、ジャヤプラの西方の北部海岸にタナメラという土地が実際に存在する。ジョセフ・ニディシ自身は、タナメラとはインドネシア語で「赤い土地」の意味だと明言した。確かに tana はインドネシア語の tanah 「土地」で、mera はインドネシア語で「赤い」を指す。おそらく熱帯性のラテライトの目立つ土地なのだろう。ナヤレはスペイン人とともに、タナメラ、アンボラ、トゥリムリスを移り住みつつ、極楽鳥羽毛とシナモンを採取して、バタヴィアへ積み出していた。しかしまたもや極楽鳥の資源枯渇により、再び転進し、現在のパプアニューアの東セピック州ウェアク西方の海岸クミブ村 (ダグア近く) に来住した。そしてナヤレはクミブ村の女と結婚した。ナヤレはクミブ村の女との間に、三男一女をもうけた。長男はショワビ、次男はドゥア、三男はニャコビ、末の妹はボヨテと命名された。ついでにジョセフ・ニディシは、ナヤレの次男ドゥアという名はインドネシア語の 2 を指す dua に由来していると明言した。彼はインドネシア語の「2」を知っていたのだ。次男がドゥアだから、まさに「次郎」であるわけだ。長男ショワビの次男系の男系子孫はショワビブス・クランでゴボヤ村へ移住し、次男ドゥアの男系子孫はドゥアブス・クランでウブン村へ移住し、そして三男ニャコビの男系子孫はニャコビブス・クランとなり、ヨボク村とジャマ村へ移住したという。ショワビの長男はアサカで、アサカの男系子孫はアサカリブス・クランとなり、クミブ村に住み続けた。アサカの4代後の子孫イェトゥウインは、現在のウェアク市サホレ・マコングリ地区に移住したが、ボイケン近くのアラスボ部族と戦い、逃亡して妻方のクブレン村へと移り住んだ。イェトゥウインは妻方居住婚し、しかも妻方クランではなく、バヒネム・クランの寄寓民となったことは先述した。現在でも妻方居住婚をする男は結構いるが、その男は自身のクラン籍を妻方に

変更することはない。つまり原則的には「婿養子」はないのだ。イエトゥウィンもまた、妻方のラビネム・クランに編入されたのでなく、単に喧嘩をしたにすぎないのだろう。妻方クランと喧嘩別れしたイエトゥウィンは、クブレン村に居住し続ける根拠を喪失したことになる。そのために居住の根拠を新たに築くために、バヒネム・クランの寄寓民となる道を選択したとも考えられる。イエトゥウィンの5代後の男系子孫こそが、ジョセフ・ニディシであった。

ジョセフ・ニディシは50歳代半ばであろうか。自分の家のハウス・ウイン（涼み小屋）で村人を顧客にした闇賭博場を開いている。彼は1975年から1990年までの15年間、主にハイランド各地で警察官を勤めた。1975年当時は、ジョセフはいまだ16歳くらいだ。こんな年齢で警察官が務められるものなのかどうか。正式の警察官でなく、その助手みたいなものであったろうか。しかしぼくはそういう警察官助手など、今までパプアニューギニアでは見たことがない。ともあれ彼の言うところでは、ゴロカ（東部高地州）、ワバグ、ワペナマンダ、ライアガム、ポルゲラ（共にエンガ州）、タリ、メンディ（共に南部高地州）など、さらにニューブリテン島ラバウル、西セピック州のヴァニモやその西方の国境に赴任した。たった15年間なのに、ずいぶんと多くの赴任地を移動していることが分かる。しかも彼はヴァニモから西方のインドネシア領ニューギニア（現：パプア州）との国境にも赴任していることだ。彼は国境地帯にも土地勘があったことになる。この土地勘は、その後の彼の密貿易の際になんらかの役に立ったかもしれない。

警察官を退職してから、ジョセフはクブレン村に帰り、オモヤ村カラポヘム・クランのマリアナと結婚し、3男3女をもうける。2000年になって、どうしたわけか、ジョセフは突然インドネシア側との密貿易に手を染めることになった。クブレン村で栽培した大麻を乾燥させて作ったいわゆる乾燥大麻を10Kg、乾燥大麻なのでかなりの量であるが、これをウェアクへ持ち込んだ。乾燥大麻を作るための器械は、クブレン村の各家に備えているコプラ製造機を応用したらしい。ウェアクのボロム地区には、インドネシア領ニューギニア北部チャンドゥラワシ湾（ヘールフィンク湾）のビアク島から渡来してきたアレックス・ヌンブリという男が住み着いており、小型のエンジン付きの船を所有している。ビアク島からの渡来人というから、インドネシア領ニューギニアの独立解放運動の難民かなと想定したのだが、そうではなくて、もっと過激で、アレックスはビアク島を中心に活動している「自由パプア運動」の闘士であった。インドネシア政府軍に追い詰められて、パプアニューギニア側に逃げてきたのだ。

2000年5月某日、ジョセフは妻マリアナと生まれたばかりの赤子ペロナ（女兒）とを連れて、アレックス所有の船に乾燥大麻10Kgを積み込み、早朝6時頃にウェアクを出港した。西方へ進み、国境を越えて、翌朝午前2時頃にインドネシア領ニューギニアの首都ジャヤプラに到着した。ジャヤプラでは、なんとインドネシア共産軍（クマンブリ）兵士オロブ・ワロミが出迎えた。もちろん乾燥大麻10Kgをオロブ・ワロ

ミに手渡し、後は乾燥大麻の代金を受け取るばかりとなった。代金の支払いはいしばらく待たなくてはならないということだった。ジョセフとその妻子は、ジャヤプラのオロブ・ワロミの手配した宿で待つことにした。ところが3週間経って、突然にインドネシア警察に宿を襲われ、ジョセフとその妻子は逮捕されてしまった。ところがよく分からないのだが、ジョセフの妻マリアナと赤子ペロナとは、逮捕直後に釈放され、国境を挟んだパプアニューギニア側のヴァニモへ送還された。ジョセフのみがジャヤプラ刑務所に収監され、麻薬非合法所持罪と不法入国罪とで25年の刑期を宣告された。

ジョセフの話にあるように、ジャヤプラでの大麻受取人がインドネシア共産軍兵士だということから、インドネシア共産党と自由パプア運動との連携を窺わせておもしろい。しかもインドネシア共産軍兵士はどうか、インドネシア国家警察とも裏で通じているらしい。なぜならジョセフは大麻代金を受け取る前に、ちゃっかりと警察に逮捕されているからだ。クマンベリ兵士は、インドネシア警察と裏取引をしたにちがいない。

どうしてジョセフだけが、不法入国罪で収監されねばならないのか。よくわからないところだ。ヴァニモへ送還されたジョセフの妻子は、無事にクブレン村へ帰り着き、クブレン村に住む妻マリアナの兄ガブリエルの世話を受けて、夫ジョセフが帰ってくるのを待つことにした。一方、ジョセフは25年の刑期だから、とてもそれをすべて勤め上げる気はない。ここからジョセフの「大脱走計画」が始まるのだ。彼はなんと計画立案後1年間をかけてトンネルを掘り続けた。こうなるとまるでハリウッド映画並みだ。1年間掘り続けて、なんとか刑務所の外に達するトンネルを完成させた。そして収監されてから5年後に、ジョセフは見事に刑務所脱走に成功し、故郷のクブレン村に帰り、妻子と再会することができた。ジャヤプラ刑務所収監中に、ジョセフの収監仲間として、インド人、インドネシア人、コリア人、フィリピン人、パプアニューギニア人、そしてモロ人がいたという。インドネシア人とは、ブギス人や華人であったらしい。ぼくが興味を持ったのは、フィリピン人と区別されてモロ人が挙げられている点だ。もちろんモロ人とは、南部フィリピンに住むイスラム教徒の総称である。同じイスラム教徒でも、マレーシア人やインドネシア人を「モロ」とは呼ばない。いくら教養があると言っても、まさかパプアニューギニア内陸に住む人から、「モロ」の言葉を聞くとはいわなかった。つまりこの「モロ」の言葉が出てきたということは、ジョセフの証言に相当の信憑性があるということだ。でっち上げの法螺話ではない可能性が高いのだ。

それにしてもジャヤプラ刑務所の収監者はずいぶんと多国籍だ。確かめてはいないが、かれらはおそらくはすべて密輸業従事者なのであろう。インドネシア政府としては、一応この種の密輸業者を取り締まっているのであろう。その背景には、フィリピン、マレーシア、インドネシア、パプアニューギニアなどの国々を国境を無視して貿易を営んでいる人々がかなりいるという事実があるのだ。南部フィリピンのモロなん

て、ことにスルー諸島の人々は、フィリピンとマレーシアとを繋いで交易をすることが家業のような人々でもある。かれらの意識では違法な密輸をやっている感じではなく、むしろ「国境貿易」とでも呼んだ方がよいかもしれない。しかも相当な伝統でもある。近代国家が成立する以前から存在するわけだからだ。

パプアニューギニアとインドネシア領ニューギニアとの間の「国境貿易」もまた、同様の伝統があった。Pamela Swadling の『Plumes from Paradise』(1996)によれば、1660年以前から西ニューギニア(現在はインドネシア領パプア州、以前はイリアン・ジャヤ州と呼んだ)西端域ラジャ・アンパット諸島から北部海岸にかけては、香料諸島で知られたモルッカ諸島(マルク諸島)テルナテ王国やバチャン王国の支配下にあり、インドのグジャラート商人団を中心的な貿易の要としたインド洋交易圏の東端に位置付けられ、西ニューギニアからは極楽鳥羽毛やマツソイ樹皮などを貢納していた。ニューギニア産の極楽鳥羽毛はマラッカやシンガポールの市場で売り出されていた。18世紀後半からはオランダ東インド会社(VOC)が、マルク諸島のチドーレ・スルタン王国を遠隔操作し、テルナテ、バチャン両王国の極楽鳥羽毛交易の権益を奪取しようとした。この地域に滞在し、極楽鳥羽毛標本収集で旅費を稼いでいたウォーレス線で有名なアルフレッド・ウォーレスもまた、VOCの経営戦略に翻弄されていた。1880年代になると、枯渇しつつある極楽鳥の新たな産地として、東ニューギニア北岸(現パプアニューギニア 東セピック州)へと、テルナテ渡来の華人やブギス人が進出してくる。丁度ドイツ領ニューギニアの開発が開始されていた。ジョセフ・ニディシ一族の始祖ナヤレがスペイン人と共に、テルナテからパプアニューギニア北岸へ渡来したという伝承も、同じ時期であったろう。20世紀初頭から第一次大戦までは、ヨーロッパでの爆発的な極楽鳥羽毛ブーム(主に婦人用装身具)もあって、しきりに西ニューギニアから現在の国境を越えて、極楽鳥ハンターが出没するようになる。かれらはセピックの住民に銃を貸与して、極楽鳥狩猟を実行していた。その後は欧米圏で極楽鳥の保護運動が盛んになり、ヨーロッパ市場は公式には閉鎖されたが、おそらくは現在に至るまで極楽鳥羽毛の密貿易は続いているらしい。ヨーロッパ市場は閉鎖されてもなお、アジア域内市場圏ではその需要が顕在だからだ。

ジョセフ・ニディシの行った乾燥大麻の「密貿易」とは、昔からのニューギニア北部海岸沿いに、東インドネシア、ことにマルク諸島との間を結ぶ長距離交易ネットワークの現代版と密接な連関があることがわかる。事実、最近の東セピック州の村々では、しきりにインドネシアに出かけて、安い物品を買い集めて、パプアニューギニアに持ち込み、いささかの利益を上乗せして、儲けようという気運・情熱がきわめて盛んである。ウェアクのある市場では、インドネシアやフィリピンから持ち込まれたタバコを、ぼくもたいへん有難く買い求めることができるのだ。なにせパプアニューギニアの物価は、アジアに比べてあまりにも高すぎるからだ。これからもこうした「密貿易」というか、「国境貿易」がますます盛んになっていくような気がする。

【参考文献】

Hogbin, Ian

1970 *The Island of Menstruating Men; Religion in Wogeo, New Guinea*. London: Chandler Publishing Company.

Swadling, Pamela

1996 *PLUMES from paradise*. Papua New Guinea National Museum

Mead, Margaret

1947 The Mountain Arapesh. *Anthropological Papers of The American Museum of Natural History*, Volume 40: part 3. New York: The American Museum of Natural History.

1977 *Letters from the field, 1925-1975*. Harper & Row. Publishers.

Hage, Per

1981 On Male Initiation and Dual Organization. *Man* Vol.16 no.2.